

この「研究レターHem21オピニオン」は当機構の幹部、シニアフェロー、上級研究員が
研究活動や最近の社会の課題について語るコラム集です。

(「Hem21」は、ひょうご震災記念21世紀研究機構の英語表記であるHyogo Earthquake Memorial 21st Century Research Institute の略称です。)

発行:(公財) ひょうご震災記念21世紀研究機構 学術交流センター ☎078-262-5713 〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2 (人と防災未来センター)



ワシントンの反貧困デモと「モラル・エコノミー」 そして東日本大震災

研究調査本部上級研究員 片山 裕

昨年、ウォール街で始まった経済格差に反対する抗議デモは、今日の世界経済の主演である金融資本に対して、「貪欲(greedy)」であるとの道徳的な非難を浴びせている点で、これまでの反格差運動をさらに一歩推し進めた観がある。オバマ大統領も規制の必要性に言及した金融資本の暴走気味な展開は、言うまでもなく今日の政治経済のルールに照らして合法的である。国際金融に携わる人たちは、「貪欲」といった非難があまりにもナイーブで時代錯誤的であると、心中大いに反発しているに違いない。今日世界の多くの人々が高い水準の消費生活を享受し、とりわけ先進国の国民の多くが高水準の医療・年金を得られるのは、まさに大量の資本が国境を越えて自由に行き来できるためであると反論するであろう。

実は、こうした反グローバル化の動きは、19世紀半ばアジア各地に発生した「農民反乱」がそれである。農民は、近代国家が従来のものでなく金納によって国家財政を再編したときに立ち上がった。物納から金納への転換は、不作時の農民の負担を大きくし、場合によっては飢餓をもたらしたためである。

こうした反グローバル化としての農民反乱を、フランス領インドシナを事例に分析したのがアメリカの政治学者ジェームズ・スコットの『モラル・エコノミー』(1976年)である。スコットは、天候などの外的な環境によって農作物の収穫が不安定な状態にあっては、農民の最大の目的は収穫の増大(最大化)ではなく、不作時に餓死者を出さないようにする「安全第一」であるとした。この「安全第一」は、収穫の一定割合を小作料として納める借り分け小作(物納)制度のもとではある程度機能していたが、定額小作制になると全く機能しなくなる。そのため、農民は、元の「温情主義」的な借り分け小作制度への復帰も含め、地主の道徳的な責任を求めて農民反乱を起したのだと分析した。

もちろん、こうした「安全第一」が農民の最大の動機であるとする見方に対しては批判があり、サミュエル・ポプキンは、植民地時代の農民も自己利益の最大化を追求していたと手厳しく批判した。これが、有名な「モラル・エコノミー」論争である。

ところで、19世紀半ばの農民反乱は、拡大する商品資本主義の動きにとっては時代錯誤的であり、圧倒的な近代兵器を持つ植民地支配者の弾圧によってあえなくついでに運命にあった。スコット自身、農民反乱の「反時代性」を認めている。

さて、今日の反国際金融資本の運動は時代錯誤的である

うか?まず、この二つの時代の反グローバル化運動の共通点は、批判の根拠が合法性にではなく、道義性におかれていることである。ワシントンやウォール街での「反乱」は、明らかに人々の感性やモラルに直接訴える。その場合に強調されるのは、個人の利益追求には当然制約が加えられるべきであり、「共同体」の他の成員の犠牲の上に自己利益の追求がなされてはならない論理である。こうした道徳的な批判が具体的な政策論にまで昇華しない限り、散発的な運動に終わる可能性は大であろう。

他方で、この二つの時代の運動には大きな相違点も見いだせる。それは、東南アジア(アジア)の農民反乱は、ほとんどがグローバル化の周辺部(農村や都市下層)で起こったのに対し、今回の反金融資本主義の動きは、世界のパワーセンターで起こった点である。国際金融資本の自家本元で、近年の金融資本の展開を「暴走」(ロバート・ライシュ)と見て、反道徳的であるとする批判が、左翼運動と無縁であった人たちの間からも出てきたのである。この違いは極めて大きい。

翻って、今日のアジアを見たとき、アジアにおいても「モラル・エコノミー」的な議論は強まってきているように思う。グローバル化という名の資本主義の金融資本化は、明らかにより少ない「勝者」と圧倒的多数の「敗者」を生み出しつつある。ある時期までアジアでは、中間層が増大し、それが政治と経済の中核を担っていた。その中間層が急速に縮小しつつあるのである。新たに敗者となった人々は、どのように異議申し立てを行えるのであろうか。最大の武器は、やはり道義であろう。少数者の一人勝ちは、その勝者も含め、ゲームや制度そのものを根底から揺るがす危険があるとの「明日は我が身」という共同体の論理しかないであろう。

昨年3月に発生した東日本大震災と福島原発事故は、日本国民にとっても、自己利益の最大化と同時に、困難な状況においてもドロップアウトをなるべく出さないというモラル・エコノミーの論理が、今でも重要な行動指針になることを、あらためて教えてくれたように思う。

片山 裕氏

プロフィール

Profile

1949年生まれ

京都大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学

神戸大学大学院国際協力研究科教授

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構研究調査本部上級研究員

東日本大震災と殉職

兵庫県こころのケアセンター副センター長

加藤 寛

殉職とは業務遂行中に、不慮の死を遂げることで、主に消防隊員、警察官、自衛官、海上保安官などの災害救援者に対して用いられることが多い。ちなみに「殉」という漢字は、古代の中国で主君が亡くなった時に家臣が殺され、主君の遺体の周りに埋葬されることを意味しており、兵馬俑はその故事を象徴しているとされる。災害救援者以外でも、大規模な工事などでの労災死も殉職と呼ばれることがあり、黒部ダム工事では171人、東海道新幹線の敷設工事でも210人が亡くなっている。

東日本大震災が阪神・淡路大震災と大きく異なる点の一つは、殉職者の多さである。発生時刻が平日の昼間の時間帯であり、地震から津波襲来までの時間に、防災マニュアルどおりに防潮堤や水門を閉めたり、住民の避難誘導や情報収集などにあたりたりした多くの人が亡くなった。消防隊員・消防団員262人、警察官25人、自衛官2人の他にも、役場の職員、教職員、医療機関や介護施設の職員などを含めると、数百人の尊い命が奪われた。

災害救援者が業務を通して経験する心的外傷(トラウマ)体験を、惨事ストレスという。生命の危険を感じる現場活動、悲惨な遺体を扱うこと、過酷な環境での作業などがその典型的な状況であるが、同僚の殉職はとりわけ大きな影響を、現場に居合わせた同僚のみならず職場全体に及ぼすことが知られている。

消防白書によれば、消防隊員の場合おおむね5、6人が年間に殉職している。2011年を除けば、この10年間でもっとも多いのは2003年で、これは兵庫県内で5人が亡くなっているからである。この年の6月、神戸市西区の民家火災で住民の捜索のため鎮火した家屋に侵入した救助隊員らが4人、12月には西宮市の商業施設の火災現場で救助隊隊長が、相次いで亡くなった。私は両方の事故後に、それぞれの消防本部の依頼を受け、仲間を失った消防隊員たちの面接を行った。そこで感じたのは、組織が職員をねぎらい、そして殉職者をきちんと弔うことの重要性であった。例えば、神戸市の事故では、過失の有無を警察が捜査している状況であったが、幹部の一人が事故から数日後の記者会見で、「現場の判断ミスではないか」との辛辣な質問に対して、即座に「自分は、過失があったとは思っていない」ときっぱりと言いつつ切ったことが、現場隊員の大きな支えになったと多くの隊員が述べていた。このことを通して、職場が職員を守ると

いう姿勢の重要性を痛感させられた。こうした態度は、一人一人の隊員の適応力を上げるだけでなく、職場全体で危機を克服しようとする力を発揮させる。

総務省消防庁は大災害や殉職事故などのように、活動した隊員たちが心理的に大きな影響を受ける可能性がある場合に、精神科医や臨床心理士を派遣する制度(緊急時メンタルサポートチーム)を以前から運用している。私はそのチームの一員として、今回の震災で殉職者が出た宮城県内の2つの消防本部に派遣された。これとは別に、岩手県からの要請で3カ所の被災した消防署を訪れた。ほとんどの署では、大切な車両、機器、そして消防署そのものまでも失っており、全国各地の消防署が置いていった他の地域名が入った車両が、ずらりと並んでいる所もあった。殉職だけでも職場を危機に陥れる一大事なのに、何もかも失っている状況に、私は何を話していいのだろうと途方に暮れてしまった。それでも阪神・淡路大震災や兵庫県内で起こった殉職事故の状況を例に挙げながら、惨事ストレス対策は職場全体で取り組んでほしいことを話した。例えば、殉職者を弔うことはとても重要で、できれば職場としての葬儀か、せめて遺影を飾ることはできないだろうかと提案した。それに対して、弔いをしたいのはやまやまだが、消防隊員だけでなく役場の人も、消防団員もたくさん亡くなっていて、消防士だけを特別扱いするわけにはいかないと、今は体制を整えることが至上命令であってそんな余裕はないという意見が多く返ってきた。しかし、亡くなった人や遺族のためだけでなく、生き残った人のためにも、そうした配慮は大切なのですよという、少しは理解してもらえたようだった。その後、いくつかの消防署では独自に慰霊式をしたという話が伝わってきた。また、毎年行われている全国殉職者慰霊祭が、昨年は東日本大震災で亡くなった方を特に弔う式典として挙行され、退院されたばかりの天皇陛下がご出席になったことは、多くの遺族にとって本当に慰められることだったのであろう。社会全体が、救援者をねぎらうことを、忘れてはならない。

加藤 寛氏

プロフィール Profile

1958年生まれ

神戸大学医学部卒業。医学博士

兵庫県こころのケアセンター副センター長・診療所長